ＮＯ！リニア

No.１５７
2022年11月８日
ＪＲ東海労働組合

ＪＲ東海労ＨＰにアクセス

大井川水問題パンフは問題だ！⑨

残土置場の崩壊の危険性大！自然を甘く見ている会社！

リニアパンフの質問５は、「豪雨等により、発生土置き場が崩れませんか？」で、「法令等で定められた技術基準に基づき、調査、設計、施工、管理を行い、安全性を確保します」と回答しています。質問に対し「崩れない」と明確にしていないことは、「崩れる恐れがある」と受け止めることができます。

南アルプストンネルの残土の総量は約３６０万m^3で、害のない通常土が燕沢（つばくろさわ）付近などに、重金属などが混入した対策土が藤島沢付近に置かれるとされています。熱海市伊豆山で発生した土石流（盛土崩落）の約６５倍もの残土量です。燕沢付近の残土の規模は、長さ約１㎞、高さ約７０ｍ（２０階建のビル相当）という、とてつもないものです。燕沢付近に限らず、南アルプス山脈は、年間平均４㎜の隆起が起き続けており、大変危険な場所です。これには、静岡県や有識者などから反発が起きています。

会社は「維持管理は、将来にわたって当社が責任を持って行う」としていますが、経営破綻の恐れがあるというのに、維持管理の資金を投入する余裕はあるのでしょうか？勿論、経営が破綻すれば維持管理はできません。伊豆山の土石流では、不動産会社も施工業者も地主も、責任逃れに必死です。

また会社は、排水設備は１００年に１回の確率で発生する降雨量を想定して設計を進めるとして、盛土の開始位置を官民境界から１０ｍ程山側に引き下げ、大井川の氾濫時にも盛土が流失しない、としています。しかし、巨大な山のような盛土の排水設備はどのようにつくるのが疑問です。昨今の台風シーズンなどでは、線状降水帯が長時間停滞し、土砂災害が相次いでいます。ただでさえ軟弱な地盤で土砂崩壊が発生している中、更に盛土を置くことは大変危険なことです。盛土が崩れた場合、流れる距離が１０ｍで収まるわけがありません。何とも自然を甘く見ているのではないでしょうか。